

コ ラ ム

西洋医学と代替医療

大谷 正夫（協同総研顧問）

医学などという専門領域の話になると、全くその方面にずぶの素人である私には、何も語る資格はない。しかし、患者として入院した自分の経験を通しての感想めいたことを述べるなら、多少のことは言えるつもりである。

まず、医師や看護婦の全く献身的な治療と看護に当たる姿に接すると、自ずと頭が下がり、休む暇さえもないのではと心配になってくる。

これは私の経験だけではなく、多くの人がそのような医療現場を経験している筈である。

このような献身的で、思いやりのある仕事ぶりこそ、正に協同組合人が日常的に本来とるべきものではないかとさえ痛感させられるのである。しかし、彼らはそうすることが職業なのだからというのなら、協同組合も本来そうなのだと答えたい。

さて長期入院などで、彼らと親しくなると、ついプライバシーにわたる話も時にはでき、そのことから余計な心配も始まる。忙しくて、これでは結婚することがためらわれるとは、若い医師や看護婦の数人から聞かされた話である。

特に大学病院にいる間は殆どむりでしょうねと。また、その忙しさから、本を読んだり新しい医療情報や技術をものにする余裕があるのかとさえ思え、毎日の臨床医としての経験のみで、それこそ、果たしてスピードをもって進歩する医術を取り入れてもらえるのか、素人の患者としての杞憂が始

まるのである。

病院の医療は、専門の診療科目にわかれ、同じ科の中でさらに細分化された専門医による治療がなされるのが一般であろう。患者にとっては専門性をもった医師は頼みの綱である。いわゆる名医にでも出合えば、それこそ患者にとっては福音である。

しかしながら、ちょっと専門から外れる病気は、その医師の範疇ではなく、別の専門医にまわされることになる。大学病院や総合病院であればまだその専門医が存在するが、それでも関係する局部を主として診るのであって、人間の体の全体を診るわけではない。多くの科にまたがり治療を受けても、結果は部分部分の並列であり、一人の人間としての総体的な診断所見を望むのは無理であるように思える。

このような数珠つなぎの医療に、患者は決して満足してはいない。異なる局部の病気は新たな診療科目で診察を受けなくてはならず、新たな労力が必要となり、新たな薬の山と精神的不安につきまとわれる。

専門分化した医療でなく、人間の全体像をとらえるトータルな医療、すなわちホリスティック(Holistic)な医療が、これからは是非とも必要と思われるのである。からだ全体のこと、例えば食事、体質の改善、心のケアの問題までも含む総合診断と治療である。

イギリスの病院などでは、全体を診るホリスティック・ドクターが存在するようである。

イギリスのブリストルではそれらの医師が、コープを組織し各病院や施設と契約を結んでいるとのことだ。ホーリスティック医療で特に必要なのは、人間の抵抗力、すなわち免疫力を高めるための治療ではなからうか。食事療法や精神免疫治療に関するものは特に必要と思える。

落語を聞き、笑うことで免疫力は高まるとされている。大阪の吉本興業で漫才を聞いた患者のグループの免疫機能が活性化したというのは有名な実験報告である。小生もそのひそみに倣い、免疫力を高めようと落語の寄席に何度か足を運んでみた。古典落語はいつでも面白く聞けるが、最近の落語はネタやオチがつまらないものが多く、落語家の勉強不足が気になり、免疫力が高まるどころか、逆にストレスが高じてしまった経験がある。

日本の病院では、先に述べたように医師や看護婦の思いやりのハートウエア(Heartware)ではまずまずであるが、患者の免疫力を高めるようなソフトウェアやハードウェアの工夫が不十分で、誠に殺風景なところが多い。患者は基本的にベッドに寝た状態にさせられ、娯楽や音楽、文芸、スポーツ、各種趣味などなどはすっかり切り離され、せいぜいテレビを枕元で視るていどである。それらを充実するには、コストをどうするのか、保険ではカバーされないなどが直ぐに反論として返って来そうである。

西洋医学あるいは現代医学といっていよいのか、とにかく、どこでも遭遇するのは検査・検査、投薬・投薬、そして手術などの組み合わせであるようだ。すべて科学的な根拠がないと話にもならない。科学的であること

は勿論重要であるが、この根拠のあるなしで、峻厳に治療の正当性が問われてしまうのだ。

巷でよく代替医療(オールタナティブ・メディスン)というのを耳にするが、西洋医学ではほとんどこれらを認めていない。なかには効く人もあるかも知れないが科学的証拠がないのだから医学的に認める訳にいかないということである。

この科学的証拠にもとづく医療(EBM、エビデンス・ベースト・メディスン)の考え方は、アメリカの保険会社が、保険金の支払時に鋭く要求するところから広がった考えのようだ。

一方、代替医療の側では、西洋医学で打つ手がなくなったとき患者を見放すだけではないかと批判している。例えば免疫療法や漢方やその他多くの民間療法的(現在は)な治療には、最後の綱と頼む患者であふれている。それで病状が改善されたというレポートは非常に多い。しかし代替医療は、年単位の遅効性のものが多く、時には病気のスピードに追いつかない。

代替医療側の問題として、病気が直ぐに直っただの、癌が消えただの、センセーショナルな宣伝が多すぎるし、保険がきかないので、足元をみて、高い診療費を請求する所もでているなどマイナスイメージもある。

しかし患者は藁をも掴みたい、そしてその藁が海面に浮上できる藁であってほしいと願っている。そのため患者としては西洋医学と代替医療のうまいドッキングを強く望みたい。代替医療が非常に多い今日、その治療の科学的エビデンス発見のプロジェクトを、政府は奨励し援助すべき時期にきているのではなからうか。